

震災地復興への熱願をこめて

夜明け前の京阪神を襲った大地震で神戸の街は一瞬にして廃虚と化した。堅牢を誇るビルがもろくも倒壊し、崩れた家屋の下敷きになった多くの人々の命が失われた。都市生活を支えてきた交通網が寸断され、ガス、水道の供給も途絶え、住む家を失った市民は避難所で僅かに雨風を避け、不安な毎日を送っている。……しかし震災から二週間経ち、ようやく復興の槌音も聞かれるようになった。地震の悪夢から醒め、被災地の人々も疲れきった表情の中、わずかに微笑みを甦らせ、必死にかつての日常生活のリズムを取り戻そうとしている。全国から支援物資が陸續と届き、日本各地至るところ、あらゆる組織、団体で被災者のための救援募金活動が展開されている。

震災のもたらした不幸はこれからも計り知れない重さをもって残された被災者にのしかかるだろうが、国内外からの温かい支援にも支えられて、被災地の人々の生活が少しでも早く明るさを取り戻すよう願われてならない。

こうした新規播き直しの熱い期待をこめて、これから節分の行事が全国で行なわれる。去って行った年の悪邪を追い払い、春を迎えるに当たって一年の幸いを願う追儺式(鬼やらい) – 古来の儀式が庶民のお祭りとして定着したこの節分会にこめられた素朴な願いは、今、多くの人々の心に共鳴をうみだすだろう。節分会を厳修する寺院、神社でも今年は、恒例の法会に加え被災地復興の祈願行事を実施するところが多いようだ。

政局の著しい混迷、生活実感の伴わぬ景気回復、そして最後の追い打ちをかけるような大震災と、鈍色に覆われたような一年間だったが、一日も早く曙光を見ることができるよう、読者とともに祈りたい。(8-15面)

境内埋めるだるま

被災者救援へ墨跡展も

◇妙心寺派法輪寺

達磨寺の通称で知られる臨済宗妙心寺派法輪寺（佐野大義住職、京都市上京区下ノ下立売通）の節分大祭は、全山が“だるまさん”で埋め尽くされる。故古川大航妙心寺派管長九十二歳の真筆“達磨大禅画”、中国西安・碑林博物館から昨年招来された面壁達磨大師図石碑、やはり中国渡来の隻履達磨大師木像など様々なだるまを拝観できる。

名物の佐野住職による“だるま説法”、ことしのテーマは「歸家隠座」。三日間にわたって毎日、大書院で朝十時と十二時、昼二時と四時、夜六時と八時の合計六回行なわれる。また、厄除開運・諸願成就の起上がりだるまさん授与、ボケ封じご祈祷の他、般若大祈祷も三日間、終日厳修されている。

達磨寺山主佐野和尚も半切、茶掛、横物、色紙などの展示即売会も実施されるが、今年は阪神大地震被災者救援に目的を絞る。約百展の墨跡をチャリティー販売した収益金はNHK厚生文化事業団を通じて被災地の兵庫県へ寄託する予定だ。

参拝者には茶席弗云庵での抹茶の接待（お茶券三百円）や分福茶亭での無病息災ハト茶接待（無料）があり、空くじなし総当たりの分福福引などのお楽しみも用意されている。

最終日には奉納された祈願成就の古いお札などを集め、総供養が営まれる。

節分法話

精いっぱい生きる幸せ

真言宗豊山派炎天寺住職 本山特派布教師

吉野 孟彦

ずいぶんと昔の話ですが、俳句教室の子どもたちを連れてテレビのワイドショーに出演したことがあります。俳句を作っている子どもたちにゲストの三遊亭円楽さんが、「節分って年に何回あるのか知ってる人、手を挙げて」というと何人かが、おずおずと手を挙げましたが、答えを求められると誰もが、「一回だと思います」「一回でしょう」などという、

「いいえ違います。節分は春夏秋冬、季節の移り変わるたびにあるのです」と、例によって笑い顔で教えてくれました。

昔は節替わりとも申していたようですが、四季の中では冬が終わって春がくるという、この節替わりが一番、身心ともに嬉しい日だったのでしょう。

「ああ、これで冬を乗り越えて、春を迎えることができた」という生きのびることができた喜びを実感する日だったのです。体の中に新しい生命のエネルギーを実感する日なのです。

そして、誰もがこう考えたのです。「さて、このエネルギーで、どうやって生きようか」木の枝先のふくらみや冬草の青を見ながら、まだまだ雪が降る日もあるだろうか、負けずに精いっぱいに生きたい、いや生きることができるはずなのです。

精いっぱい生きていくのだから福よ来い、邪鬼よ去れ。福は内、鬼は外と願うのです。

でも、精いっぱいに生きるという言葉は意外とあいまいなものです。精いっぱいの中身をもう少し、つめてみないといけません。

精いっぱいに生きるということは、人々によろこんでいただく生き方だと言ってもいいでしょう。

阪神大震災でのボランティアの方々の献身的な働き、罹災者同士の助け合い、全国での募金活動……。人々のために精いっぱい生きるということが、つきつめると自分が一番充実した嬉しい生き方をしていることになるのです。

人のために生きることが、実は自分自身の幸せなのです。幸せがぎゅっと詰まった充実した人生が最高、それを精いっぱいというのです。

阪神大震災の連日のテレビ報道で人々のあたたかい心を知ることができて、こんな嬉しいことはありません。何度も何度も涙を流しました。

あの、あたたかい心が自分の中にもあることを、豆を撒きながら、確認しあいましょう。

最後に下手な俳句を一句、

豆撒くよ鬼に疑問を持ちつつ孫

孟彦

【写真は省略】

こんな時こそ...

地震に負けず例年通り

◇福島聖天◇

“福島の聖天さん”として親しまれている大阪市福島区鷺洲二ノ一四ノ一の東寺真言宗了徳院（高岡義全住職）の節分会星祭は毎年、地元福島区出身の落語家・月亭八方さんが有名人タレントらを誘って豆撒きをすることで地域住民に人気がある。

同寺が経営する和光保育園の園児らのために始まった節分会も今年で十七回を数える。近年は、同院の護持団体の「福島聖天講」の協賛で、各種イベントも講員の手で実施され、年々賑わいを見せており、福島商店街の活性化にも一役買っている。

今年は、園児のための豆撒きが午後二時すぎに行なわれたあと、一般の豆撒きが予定されている。

また、聖天堂では、午前十時から午後五時まで終日、年男が参列して開運、厄除けの祈願と豆撒きが行なわれる。

同院はこの度の兵庫県南部地震で、石燈籠が倒れたり、釣鐘や山門の瓦が落ちたりと多大な被害を受けたが、高岡住職は「こんな時こそ例年通り実施して、頑張りたい」とその意気を示している。

地震へ自覚深める

被災体験を聞く時間も

◇観音聖教◇

中国地方では初めて総チーク造りの内装を施した礼拝殿を備えた珀琳閣をほぼ完成させた観音聖教（妹尾公運琳主）は岡山県浅口郡鴨方町小坂東二八一五ノ二の総琳壇で二月三日午前十時半から、節分行事「吉祥会」を執り行なう。今年是一部、規模を縮小して経費など兵庫県南部地震の義援金とする。

今年一月八日から礼拝殿「珀琳閣」での業務を開始した同教団では、吉祥会はこの珀琳閣を使って行なわれる。妹尾琳主を導師に「おつとめ」を行ない、同琳主の法話と続く。次いで妹尾琳主が宗家となる「松風流」の舞楽の奉納があり、「招福豆撒き」が行なわれる。

また、兵庫県南部地震で被害が大きかったにもかかわらず無事であった神戸市在住の聖衆に被災体験を開く時間を設け、地震災害に対する自覚を深めることにしている。

この節分行事に合わせて「未来光明功德累積大寒写経行」が一月二十日から二月二日まで行なわれる。これは「般若心経」か「観音経秘鍵」のいずれかを写経し、十五巻を目指して行なわれている。聖衆はこの大寒写経をもって、節分である吉祥会に臨んでいる。